

「高倉天皇記」の第一節「前記」が、筆者は本文の増補記事も「秘本」に関係があるのではないかと考えて『玉葉』とした。

(注六) 堀竹忠晃氏『平家物語論序説』(昭和六〇年一〇月)の第六章「重盛像の形成」から。

(注七) 「長門本平家物語の伝本に関する基礎的研究」(『軍記と語り物』昭和四八年一二月)

(注八) 注六に同じ。

(平成三年九月七日受理)

堀竹忠晃氏は重盛の性格的特徴として、

- (1) 慈悲深いこと
 - (2) 予見能力にすぐれていること
 - (3) 心が豪であること
 - (4) 皇室尊崇の念厚く、仁義礼智信に厚いこと
 - (5) 心の優なる人であること
 - (6) 仏教に対する帰依の心の深いこと
 - (7) 親思いの孝子であること
 - (8) 文武二道の達人であること
- の八点を挙げて居られる。^(注六) 本論に即して、この八点を見直して見ると、(3)(8)の二点については、『平家物語』の中で重盛が武人として活躍する場面はないが、清盛の言葉の中で重盛の武勲が挙げられてい、一方、権力者で父の清盛を只一人で諫める重盛は「心が豪である」と評する余地もある ということであった。(1)も印象が薄い、成親に対する場面を考えるべきであろうか。本稿で目を通した処では、重盛は義兄成親や父清盛との関係で描かれることが多く、(1)(7)は一つに括れそうに見える。(2)(6)の二点も、前者は平家が清盛後も繁栄を続けることが出来るか否か に関心があり、後者は平安な世界を求めてであることから、これも一つに括れそうである。(4)の点は、基房との乗り合い事件も取り込んで、貴族の秩序を重んじることが出来るのではないか。そして、(5)の点は、そのように分を弁えている処に生まれているように見える。重盛はこの(4)(5)の点や(1)の点で、父清盛、異母弟宗盛と対照させられている。

三

筆者は本稿で文覚の言葉と重盛の言動（が描かれている場面）の二

つに就いて、延慶本を中心に『平家物語』の描いている重盛像を検討して来た。各場面に於ける重盛は、平家の繁栄が永く続くように、父清盛の狼藉な振る舞いを未然に制止する忠臣、孝子として登場することが多く、その点で清盛の追隨者である宗盛と対照させられていた。

重盛は唯一人で、時には命を賭けて清盛を諫めていて、その様は「心モ強」と見えないこともない。又、良く見ると、それらの説得、折衝の過程には「謀モ賢ク」と評される言動も認められた。このように、文覚が頼朝に語った重盛像との一致度を検討してみると、各場面の描く重盛はそれにかなり当たっていると言いうことが出来るのである。しかも、その一連の場面には「平家殿下ニ恥見セ奉ル事」の明確な虚構もある。文覚の言葉は遥かに重盛に関する虚構に結び付いている。

文覚は、『平家物語』の描く頼朝だけではなく、重盛像とも結び付いていた。周知のように文覚は維盛の嫡男六代の師であった。『平家物語』と文覚が、重盛、頼朝、六代の線で関わっているということは、主要な構想の次元で関わっていることになろう。

現在、神護寺には有名な藤原隆信筆の重盛像が伝えられている。『平家物語』の重盛と文覚との結び付きを想像するのは筆者だけであろうか。

（注一）章段名や引用文で特に断っていないものは延慶本によっている。

（注二）筆者の、この考えは拙稿「義仲と頼朝——『平家物語』での地位、序列を中心に——」（鹿児島県立短期大学紀要）平成二年十二月）を基にしたものである。

（注三）四部合戦状本は斯道文庫編校『四部合戦状本 平家物語 別冊』（昭和四二年三月）のヲコト点を解説して、本文に加えた「附録」によった。

（注四）源平盛衰記は蓬左文庫本によった。

（注五）平田俊春氏は『愚管抄』かと見られている（『平家物語の批判的研究』中巻〈平成二年六月〉の第六篇「平家物語の全編年記事と百練抄」の第二章

(文官)への尽力も合わせて述べている。一方、清盛が運命の衰えを思い知ったという言葉は、源平盛衰記や当道系諸本のうち屋代本などの一部の諸本にしかない。

清盛の重盛評である。重盛に武人として功の有った事は全ての『平家物語』にある。この重盛評は、文覚の「謀モ賢ク心モ強」「日本國ノ大將軍ニ可成ヌ人」という評に通じている。しかし、『平家物語』の中で武人重盛が活躍する箇所はない。これに対し、延慶本や殆どの当道系諸本が合わせ記す文官としての功績は、『平家物語』で描かれる重盛に相応しく思えるが、考えてみると清盛に異を唱えて、法皇の政務を庇うという場面が全てである。猶、延慶本や源平盛衰記では清盛が三回も、重盛の死で平家の運命の衰えを感じたと言っている。第二本三十 法皇ヲ鳥羽ニ押籠奉ル事

法皇は鳥羽殿に移されることになった。宗盛に同行して欲しいという御氣持ちが見えて、宗盛も従いたく思ったが、清盛に恐れて、結局随行しなかった。法皇は重盛には事の外に劣った者とお思いになった。先年、こんな目に遭う筈であつたが、重盛が命を懸けて諫めたのであつた、その重盛も亡くなつたので、憚る所なく、このようにするのであらう、将来も明りは見えぬ、と法皇は思われた。

源平盛衰記・四部合戦状本には法皇の思ひは全く記されていない。又、屋代本・小城本には、宗盛を重盛より事の外に劣った者と思われたという一文がない。

この章段は、重盛時代の「重盛父教訓之事」に对照させられているように見える(但し、源平盛衰記・四部合戦状本ではその点がはっきりと書き込まれていない)。見返せば、その「重盛父教訓之事」で宗盛は明らかに清盛と行動を共にしていた(源平盛衰記では、宗盛が重盛の装束を咎めたことになっている)。法皇を立てる重盛と清盛に従う宗盛という構図があつたと見て宜いのではないか。

第二中二十九 源三位入道謀叛之由來事

宗盛が馬のことで源頼政を謀叛に走らせたのであつたが、それに付けても重盛のことが偲ばれるのであつた。或る夜、重盛が知り合いの女性と話をしている時、蛇が這い懸かつて来た。重盛は女性を驚かさないうちに、黙つて動くに任せていた処、股立へ這入りこんだ。その時、重盛が人を召すと、源仲綱が遣つて来た。重盛が仲綱に蛇を捕まえさせると、仲綱は女性に見えないようにして持つて行き、渡辺省に捨てさせた。翌日、重盛は自ら手紙を書いて、「還城楽」に見えたと言ふ、馬を贈った。仲綱も、その時、「還城楽」の気分がしたのでさうである。重盛の心はこのように相手の心中を良く理解していた。重盛が政務を助けていたら、どれ程世も静まつていようかと、惜しまない人はなかつた。

この逸話は諸本にあって、本体は皆同じと言つて宜い。ところが、この逸話の前置きとか結びとかが延慶本以外にはあつて、次のような変化がある。先ず、長門本は「此大將は小松大臣には心きはよりはしめてすこしもに給はす 事のほかにふるまいことからおとり給へり」と前置きして逸話に這入り、「小松殿はかくこそ御なさけもふかく御心も優におはしまししか 此大將はむけになくひあひなる人もかな」と結ぶ。次に、源平盛衰記は特に注目すべき前置きはなく、「小松殿はかやうにこそまし／＼しに其おと、にていかに重盛はかゝる情なくは覺すらんと申ける」と結んでいる。当道系諸本も前置きはないが、結びは「小松殿ハ加様ニ優ニ御在スルヲ宗盛左マテ社ナクトモ人ノ馬ヲ請取テ天下ノ大事ニ及杜浅益ケレ」(平松家本。百二十句本・小城本は「優ニ」の語がない)となつてゐる。

このように重盛の死後は、宗盛の行為は重盛の時に比べて評されるのである。重盛は「なさけもふかく」「心も優」で、彼が生きていたら頼政の反乱はなかつたらうと見られていた。

この逸話は、延慶本・源平盛衰記では重盛の熊野参詣の理由を記したものの位置付けである。しかし、そこには微妙なずれが認められる。というのは、重盛の見た夢では頼朝の千日詣というのが重要な働きをしているようであった。ところが、証誠殿での啓白のなかで重盛は頼朝には全く触れず、只清盛の「惡逆無道ニシテ動スレハ君ヲモナヤマセ奉」ることだけを気にしている。延慶本の場合、第二末七「文学兵衛佐ニ相奉ル事」に頼朝が相似た夢を見たことを記している。この点から考えると、先の所には頼朝の「年来ノ宿意」と清盛の「惡逆無道」との二つの要素が編集されているのではないかと思われる。中院本・八坂本などは「小松どのはとうけのうんめいのすゑになる事がかねてさとり給へる事あり」（中院本）としてこの逸話を挙げる。そして、これを無文の太刀を維盛に渡すことの契機とするのであるが、これは延慶本・源平盛衰記の一変形と見える。南都本は巻第一の資盛と基房の乗合事件の後に、その二、三日後に見た夢として、この逸話を収める。そして、この夢を熊野参詣の契機としているが、この逸話の流れ口として無文の太刀の話が続ける等、他本とかなり異なる。これらに對して、覚一本・百二十句本などは重盛が「不思議の人にて未來の事をもかねてさとり給へる」（覚一本）ことの例としている（両足院本は表現が少し異なる）。猶、覚一本・百二十句本・両足院本も中院本・八坂本などと同じく無文に続けている。当道系諸本の場合は、前出の「小松殿熊野詣事」に見られた重盛像を繰り返して強調しているとも見られよう。

第二本二十三 小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事

重盛は日本の神明仏陀に私財を投じただけでなく、中国の仏法にも帰依していた。治承二年春、平貞能に、平家の栄花は清盛一代のことと見えるので、退転しないよう大國で善を修して置きたいと命じた。丁度その頃、上京していた妙典に奥州の金を託して、中国伊王山へ施

入するよう命じた。中国の大王は感動して、その名を寺の過去帳に書き入れた。重盛は「文章ウルハシクシテ心ニ忠ヲ存シ才藝正クシテ詞ニ徳ヲ兼」ていた。又、天命の限りあることを知っていた点でも、中国上古の賢王にも勝っていた。しかし、この重盛が「末代ニ相應セテトク失給ヌル事」は悲しいことであつた。中でも清盛は、平家の棟梁と言ふべき重盛を失つて、「運命ノ末ニナリヌルニコソ」と味気なく思ふのであつた。

重盛の大王への書状と重盛が唐の文皇帝にも勝っていたという記事の二つは延慶本の独自記事である。又、重盛が先ず日本の神仏に財を投じていたという表現と、清盛が重盛の死に平家の運命の衰えを感じたという表現とは延慶本と源平盛衰記にしかない。更に四部合戦状本は他本全てにある「當家ノ棟梁當世ノ賢人」云々、「此大臣文章ウルハシクシテ」云々の極まり文句的表現を欠いている。

この逸話は重盛の、平家一門の将来への不安、永遠に退転しない修善への執着を物語っていると見ることが出来る。前出の宋の名医の診察を拒んだ逸話と重盛の態度が異なるが、これは頼りになる世界を求めたからであろう。ところで、この二つの逸話によって、日本を小國、宋を大國と見る見方が押し出されているのは間違いない。重盛を「小國ニ相應セヌ人」と表現したのも、この二つの逸話の存在と関わっているであろう。猶、伴信友の『比古婆衣』には育王山からの返牒も載っているが、何によつたのか不明である。

第二本二十六 院ヨリ入道ノ許へ静憲法印被遣事

清盛の言葉の中に、保元以後の乱逆の中で重盛が自ら「手ヲ下シ身ヲ碎キタル」こと、法皇に忠を尽くしたこと、重盛の死んだことで平家の運命が末になったことを思い知らされたことが出て来る。

源平盛衰記・四部合戦状本・鎌倉本は殆ど武人としての重盛の功績しか挙げない。これに對し、延慶本や大半の当道系諸本は法皇の政務

の医道の名譽を失うことを挙げて、その治療を受けることなく死んでしまふ。

この逸話は長門本を除く諸本にある。但し、長門本がこれを欠いていることについては、松尾葦江氏が「人物伝に興味を示し、重盛を偉大な人物として描こうとする長門本が、何故、重盛熊野詣以下の逸話を削ろうとしたのか、説明がつかない。また旧国宝本が丁いっばいで終わっていることからみても、旧国宝本か、もしくはその底本の段階で、書写・製本上の事故のために脱落したと考えるべきであらう。」とされている。^(注七)とすれば、この逸話は全ての『平家物語』に基本的にあるものということになる。この逸話についても諸本間で以下のような違いがある（本論に関わると考えられることのみを挙げた）。まず、熊野詣での契機だが、四部合戦状本が特に記すことがないのに対し、延慶本・源平盛衰記（南都本も）は三島大明神に清盛以下の一門の人々が討ち取られる夢を見たことを契機とし、当道系諸本は五月十五日の辻風についての占いを契機としている。又、宋医の治療を拒まれた清盛について、非当道系諸本では何の反応も記されない（源平盛衰記では重盛の死んだ後に「運命の末に成にこそ」と感じたことになっている）が、当道系諸本では「日本ニ相應セサル大臣」だと言って嘆いたことを記す。更に、四部合戦状本では、証誠殿での重盛の祈念の内容が「子孫相傳シテ可とも穩便なる不覚へ 而ルは権現召て命を助ケ玉へと後生を」ということだけで、直線的に死を願うことになっている。

『山槐記』五月二十五日の重盛の出家を記した記事中に「三月被參熊野□申後世事云々」という文がある。又、先述のように『愚管抄』は「父入道力謀叛心アルトミテ トク死ナハヤト云フト聞ヘシ」ことを伝えていた。『平家物語』はこれらの記事（事実）の重なる処で成立したのだろうと思われる。四部合戦状本では重盛は平家の繁栄に見切りを付けて自ら死を祈ったことになっているが、それ以外の諸本では

権現金剛童子が「榮耀一期ヲ限テ後昆ノ恥ニ及」ぶということを重盛に伝えたという文脈である。この逸話と例の文覚の言葉との関係であるが、先ず、延慶本・源平盛衰記では「小國ニ相應セヌ人ニテ」という理由がこの逸話の重盛の死に明確に対応しているとは言えない。特に延慶本の場合は「小松殿死給事」の「平家ノ運命盡ヌル故」という表現と対応させられている。これに対して、四部合戦状本や当道系諸本は「平家ノ運命末ニ成ル哉ラン」（屋代本）という言葉が重盛の死の理由として利いている（四部合戦状本は中途半端）ので、この逸話に対応させられていると見ることが出来る。

第二本二十一 小松殿熊野詣ノ由来事

重盛の熊野参詣は三月三日に見た夢の為ということであった。その夢というのは、三島明神が頼朝の嘆願を聴き入れて、清盛の首を切つて、社に懸けたというものであった。同じ夢を妹尾兼康が見たと言つて告げに来たので、重盛は平家の世が末になったことを悟り、後世菩提の営みを始めようとする。精進を始めて五日目に夢に見たような法師の首が落ちていたので、精進を遂げず、五月二日に熊野に出立したのであった。

この逸話は源平盛衰記・南都本と当道系諸本のうち覚一本や中院本などにある。源平盛衰記・南都本・中院本・八坂本などは延慶本と同じく重盛が三島神社に参詣したことになっている。しかし、その中でも源平盛衰記では三島明神が吉備津宮に命じて討たせたことになっている。一方、覚一本・百二十句本・両足院本等では春日大明神が討ち取つて、自分の社に懸けていることになっている。又、清盛を討つた理由も、延慶本・源平盛衰記では頼朝に同情してということだ（討つて頼朝に渡すという中院本・両足院本等もこちら側か）が、覚一本・百二十句本等では「悪行超過し給へるによて」ということ（南都本はこちら側か）になっている。

諸社、臨其時引立西門外、侍等相具參向所々云々」。「於内府公有父子儀、寛弘御堂被奉馬於諸社、其儀相叶」。「内大臣誦祝詞三反（以天爲父、以地爲母、領金錢九十九令咒命）置錢於皇子御帳御枕上」。「内大臣取竹刀奉切之」とある。『平家物語』が同日に行われたことや『山槐記』などの資料に基づいて、その過半を描いていることは明らかである。しかし、重盛が悠々迫らず、美美的行列を従えて遣つて来たこと、又、その言動を賞賛されたことは資料に見られない。『山槐記』に「近臣并宮司等周章」とあり、その「近臣」の割注に重盛の子供「權亮維盛、左少清經、侍從資盛」が並んでいる処からすれば、悠々迫らぬ重盛は前出の章段「重盛父教訓之事」等に合わせた『平家物語』の虚構かと思われる。同様に、重盛を清盛・宗盛と比較して評するのも『平家物語』の構想に基づく虚構であろう。例えば、「錢九十九文」は「御産以前自禪門被獻之、大夫取之被傳内府」等とあり、清盛が慌てて、我を忘れていた（全てについて）とは到底考えられない。

第二本二十 小松殿死給事

治承三年八月一日、重盛が薨じた。重盛の死は惜しまれ、「平家ノ運命盡ヌル故」（「故」が付いているのは延慶本だけ）と言われた。世の中はどうなることかと嘆かれたが、宗盛方の者には悦ぶ者もいた。

この記事も『平家物語』諸本にあるが、かなりの異同がある。長門本は宗盛方の受け取り方に言及せず、源平盛衰記では、この一連の記事は三箇所に分かれて出て来、清盛も「運命の末に成にこそ」と感じたことになっている。又、四部合戦状本はここに「吉人にて心豪に計ヒモ勝テ御ケレハ」という表現がある。当道系諸本は、屋代本のように延慶本の記事を全てもつものと、平松家本のように「平家ノ運命盡ヌル」といった表現のないものとに分かれる。

重盛の死は『愚管抄』や『百鍊抄』といった、後に成った歴史資料で『平家物語』のように八月一日とされている。又、これらの資料は

重盛の人物について大方肯定的だと言える。猶、『百鍊抄』が「武勇雖軼時輩」と言っているのは、「心豪に計ヒモ勝レ」に通じそうである（但し、『平家物語』では重盛が「武勇」を振るう場面はないと思う）。このように重盛は比較的賛美して描かれているが、『平家物語』のように彼の死を「平家ノ運命盡ヌル」ことに結び付けたものはない。従って、これは『平家物語』の作者の構想に関わる虚構ではないかと考える。先述のように文覚は「平家ハ世末ニナリタリトミュ」と述べていた。この文覚の言葉は、平松家本等を除く諸本では、この作者の構想を踏まれていることになる。「平家ノ運命盡ヌル」ということは都の多くの人に感じられ、口にされたものことになっているが、そうだとすれば、文覚は極普通の感想を述べただけとも言える。猶、延慶本のみは「故」という語を付けていて、次の「小松殿熊野詣事」に対応させようとしている風に見える。

第二本二十一 小松殿熊野詣事

重盛はこの年の夏、熊野に参詣した。そして、証誠殿の前で、子孫の繁栄が続くのなら父清盛の悪心を和らげよ、父一代の栄華に過ぎないのなら自分の運命を締めよと祈念した。その時、重盛の首の辺りから「大ナル燈爐ノ光ノ様ナル物」が揺らめくのを或る一人の侍が見ていた。下向の時、岩田川に維盛・資盛の浄衣が重服の色になって映った。源季貞が見咎めて、着替えるよう進言したが、重盛は所願成就を感じて、「悦ノ奉弊（マヤ）」を行い、そのまま帰宅した。六月十三日に御方違の御幸があった。維盛は御繩助を務めることになっていたが、最後を感じた重盛は維盛を呼んで酒を進めた。そして、無文の太刀を引出物にして、自分が先立って、維盛に孝養されようと思っているのだと述べる。七月二十五日、首に瘡が出来るが、重盛は治療もせず、後世菩提の勤行のみをおこなっている。清盛が驚いて治療を勧め、宋の名医を紹介しようとするが、重盛は、自分の運命は天心にあること、日本

右兵衛督光能卿ヲ呼出シテ カ、ル次第ニテ候ヘバカク沙汰シ候ヌ
是ハ偏ニ爲世爲君ニ候 我身ノ爲ハ次ノ事ニテ候 トゾ申ケル サ
テヤガテ福原ヘ下リニケリ 下リザマノ出タチニテ参リタリケリ

この清盛の言動はこれでそれなりに完結しているように見える。つまり、清盛は所謂鹿谷の陰謀の処理の為に福原から上京したのであった。そして、西光を処刑し、成親等を流罪に処した。この間、清盛はほぼ思い通りに事を処置出来たのではなからうか。そのことが下向に当たつての報告に表れているように思える。西光から取つた白状を突き付けて、自分の処置の正当性を主張したのは、清盛の行為として一貫していよう。この間に重盛の諫事があつて、それに妥協して、このような行動になつたとは見難い。従つて、『平家物語』のこの逸話も虚構だろう。さて、この逸話に描かれている重盛は平氏の繁栄が永く続くことを願っている。その為に父清盛の処置にも反対しているという風に見える。平氏に刃向う者は何者であれ、武力に物を言わせて現実的に処理して行こうとする清盛に対し、重盛はそのような人間の力を越えたものの力を見ている。それが「神冥仏陀ノ擁護」であり「冥衆善神ノ加護」である。重盛は、それらの「神冥仏陀ノ擁護」「冥衆善神ノ加護」を得るには、世の秩序を守ることが大事だと考えているのである。従つて、重盛は、身を投げ出し、言葉の限りを尽くして父清盛を説得しようとする。先述のように、只一人で、一門の永い繁栄の為に説き続ける重盛は「心モ強」のもう一つの姿ではないかという気がする。一方、第一末十九「重盛軍兵被集事^{付周幽王}」は重盛の「謀モ賢ク」ということを描いたものであろう。この点で、例の文覚の言葉にぴったり対応している。そのことと関係があるのであろうか、先述のように源平盛衰記は「小國ニ相應セヌ人」という言葉もこの章段で対応させようとしていた。

第一末二十一 成親卿流罪<sup>付鳥羽殿ニテ御遊事
成親備前國へ着事</sup>

重盛像の検討（橋口）

重盛の尽力で成親は流罪に減じられる。備前への出航の前に成親に手紙が届く。その中で、重盛は都近くに置けなかったことを嘆き、「親ニ先立テ後生ヲ助給ヘトコソ天道ニハ祈申候ヘ」と述べている。難波にもよく宮仕えするよう言い送った。

これらの記事も諸本にある。しかし、重盛の尽力で死罪を減じられたという文は源平闘諍録や当道系諸本のうち鎌倉本等にはない。また、親に先立ちたいという希望は、延慶本・長門本以外では「世にある甲斐なくそ覚え侍り」（源平盛衰記）という一般的な表現になっている。縁者成親の為に力を尽くす重盛は、前出「新大納言ヲ痛メ奉ル事」の章段でも描かれていた。重盛は「御命計ハ申請テ候フ」と言い切っているが、結局成親は暗殺されてしまふので、落ち着かない処もある。延慶本・長門本は、「親ニ先立テ」という表現をして、例の文覚の言葉等に対応させている様だ。

第二本八 中宮御産事^{付諸僧加持事}

治承二年十一月十二日の朝から中宮徳子は産氣付いていた。重盛は例によつて慌てることなく遣つて来る。引出物を整えて、美々しい一行であつた。引出物も先例に適つていた。重盛は中宮の父ということになつていたが、皇子の誕生に当たつて、天地を父母とせよと祝つて、臍の緒を切る。重盛の言動は「優ニヤサシ」と評される。

この逸話も『平家物語』諸本にある。非当道系諸本は延慶本にかわらないが、当道系諸本では誕生に当たつての重盛の言葉に「御壽命ハ方士東方朔力齡ヲタモタセ給テ御心ニハ天照大神入カハラセマシマセ」が追加されている。又、当道系諸本では、中院本・八坂本等を除いて、過半の本がこの間の重盛の言動の評価に「目出タカリシ」という表現を用いている。猶、屋代本だけは重盛が「急キ」御産に駆け付けたとする。

この逸話に関する記事は『山槐記』の同日の条に、「内大臣被奉馬於

清盛が法住寺殿へ押し寄せようとしていると盛国に告げられて、重盛は急いで西八条殿に駆け付けた。西八条では一門を始めとして発向の用意が整っていた。そこに重盛は直衣姿で這入りこみ、宗盛の上座にむずと着いた。皆きまり悪がった。清盛も腹巻の上に慌てて素絹の衣を引き懸けて出て来た。清盛は今回の首謀者が法皇であったことが分かったので、その幽閉の相談の為に使者を何回も遣したが、と語り始める。重盛は、清盛の意向を聞いて、暫く涙を流していた。それは、大政大臣の位に昇り、出家した人が甲冑を帯しているのを見て、栄花の尽きることを感じたからだ。そして、語を継いで、平家一門が「希代ノ朝恩」を受けていること、従って謀叛の企てがあってもおかしくないこと、しかし運命は尽きていないので企てが発覚したこと、よって成親以下に所当の罪を与えた後は益々君に忠節を、民に哀憐を尽くせば「神明仏陀ノ擁護」を得て平穏が続くと考えられること、重盛は道理に就きたいと考えるので清盛が法皇を拘束しようとすれば父子で戦うことになること、重盛は忠と孝との板挟みにあつて無益の身だから首を刎ねて欲しいこと、平家の運命も末に成つていゝと思われるので早く首を刎ねて欲しいことを、訴え述べる。涙を流して聞いていた人々をも重盛は、ともかく諫めてみるべきであるのに同調してしまふようでは頼もしくないと批判する。宗盛は真赤になる。重盛の立つのを見て清盛は負け惜しみを言う。重盛は一同に自分の首を刎ねてから法皇との事を構えるよう念を押す。小松殿に帰つた重盛が盛国を使者として兵を召すと、二万七千余が馳せ集まつた。武士のいなくなつた西八条邸で清盛は、重盛と事を起こしては大変だと仏道修行の真似を始める。重盛は着到を付けた後、誤報であつたと述べて兵を帰した。重盛の真意は、自分に付く兵の程を知り、且つ、清盛を制止することであつた。話を聞いた法皇は「雖ヲハ恩ニテ報セラレニケリ」と感嘆した。

この一連の逸話は全ての『平家物語』にあるが、細部で微妙に異なる。異同の主なものを挙げると、

宗盛が重盛の装束を咎める (源平盛衰記)

重盛が宗盛の上座に着いたことを記さない (源平闘諍録)

重盛が一門の人々を非難する場面が二回もある (延慶本)

源平闘諍録では盛国が重盛を呼びに遣されているし、当道系諸本では清盛が待つていた風を装わず、その場で相談を始めている

運命が尽きていないので謀叛が発覚したという言葉がない (長門本) 保元の為義・義朝父子の例を挙げない (屋代本など)

首を刎ねて欲しいということが繰り返しの体裁を取っていない

(当道系諸本)

清盛の負け惜しみは源平闘諍録にはなく、源平盛衰記では気嫌悪く、諸事手を出さないと言い捨て、長門本や当道系諸本では「御ひか事やいてこんすらんと思計そ」と弁解して、又重盛に批判される西八条邸に長門本・源平盛衰記では忠度や貞能達が使者として来ることになっているが、源平闘諍録や当道系諸本で相談を受ける貞能は使者とは特に記されていない

この章段末に、源平盛衰記は嘉応の相撲の節の逸話を記すが、当道系諸本はさり気なくその時の誉め言葉の一部を引いて、重盛賛美でこの句を終える。一方、源平闘諍録には相撲の節の評判の言葉はなく、当道系諸本と同じ賛美の言葉だけで終える

といった点がある。

『愚管抄』は重盛について「父入道力謀叛心アルトミテ トク死ナハヤナト云フト聞ヘシ」ことを伝えている。この逸話に通じる記事と見えるが、『愚管抄』には清盛が法皇の御所に立ち寄つたことを次のように記している。

入道カヤウノ事ドモ行ヒチラシテ 西光が白狀ヲ持テ院へ参リテ

成親が拷問を受けたりしてからかなり後になって、重盛は維盛を引き連れて、平服で、西八条邸に遣つて来る。清盛を始めとして一同、意外に思うが、重盛は「どこに大事件があるうか。」と問題にしない。重盛が、成親の押し込められた一間を見つけて近付くと、成親が命乞いをする。最初自信なさそうであつた重盛も、成親の出家の意志に、身代わりにもなりましようと言ひ合つて、清盛に会いに行く。清盛は成親を即座に切ることにしていた。重盛はそれに対して、後白河法皇の寵臣であること、謀叛を企てたということは聞いたが、誤りがあるかも知れないことの二点を挙げて、逮捕した上は特に刑を急ぐ必要はなく、充分に調べるべきであること、流罪で充分ではないかということとを主張する。清盛が不服の様子であると、重盛は更に、自分の首を刎ねてから思いのままに振る舞つて欲しいと述べ、信西の例を挙げて死刑を行うとその報いがあると言われている旨を詳しく説く。そして、子々孫々までの繁栄を願うならば、死刑というような方法は避けるべきであると縷説して、遂に清盛に刑の執行を思い止らした。重盛は猶も、念の為に主立つた者に軽率な行動に奔らないように注意し、難波・妹尾を訓戒してから帰る。

この逸話も『平家物語』諸本にある。非当道系諸本は殆ど変わらないうが、長門本には流罪で充分ではないかという言葉がなく、源平闘諍録は清盛の言動（反論など）が詳しくなっている。一方、当道系諸本は清盛の不服の態度を記さず、重盛の二回分の言葉が続けて説かれるという風に、重盛の弁説（の内容）を中心にして場面を単純化している。従つて、中院本などで、自分の意見を聴き容れる気がなければ重盛の首を刎ねよと迫っている本もあるが、大半の当道系諸本にはそのような表現はない。又、重盛と成親が対面する場面も、成親が一気に出家の意志まで述べて命乞いをする事になっていて、ここも単純化されている。

成親の逮捕等のことは『玉葉』の六月一日条以下などに記されている。『玉葉』に重盛が出て来るのは二日条の「或云、成親於路可失之由云々、又云、左大將重盛平に申請云々」の処である。詳しいことは分らないが、『愚管抄』は、

公卿ノ座ニ重盛ト頼盛ト居タリケル所ヘ 何事ニカメシノ候ヘバ參テ候トテ 諒闇ニテ建春門院母后ニテウセ給テ後ノ事ニテゾ 諒闇ノナヲシニテ、ヨニヨクテキタリケリ 出候ハンニコマカニ見參ハセントテアリケルヲ ヤガテカクシテケレバ 重盛モ思モヨラデアキレナガラ コメタル部屋ノモトニユキテ コシウトノムツビニヤ コノタビモ御命バカリノ事ハ申候ハンズルゾト云ケリ

と記している。『愚管抄』の重盛登場の処は『平家物語』と全く異なる。しかも、その経緯からすれば、清盛が重盛や頼盛（俊寛の縁者であつた）に煮え湯を飲ませるような処置に出ている風に見える。成親については『玉葉』の十一日条に「是禪門依私意趣逐其志」と記されている。或いは、この時、清盛・重盛父子の間には深刻な対立が生じたのかもしれないという気がする。この点は『平家物語』に通じる。ただし、歴史資料から考えられるのは、寧ろ清盛の攻撃的態度である。従つて、真黒になつている清盛を弁説で白ませる重盛は、やはり『平家物語』の虚構だろうと思われる。この逸話における重盛像の印象的な処は、「公人」としての言動の徹底振りとその熱弁であろう。『平家物語』には、所謂「心モ強」という場面は出て来ないが、貴族としての建て前を説き続けることにも使えらるれば、唯一人興奮に捲き込まれず、又権力者であり父でもある清盛に分を説く重盛は「心モ強」といえないくもない。「謀モ賢ク」も目立たないが、非当道系諸本で、重盛が自信なさそうな言葉遣いで、成親から出家の言質を引き出しているあたりに認めても良いのではないかと思われる。

道ガ教ニハアラデ 不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ 子ニテ資盛トテアリシヲバ 基家中納言増ニシテアリシ サテ持明院ノ三位中將トゾ申シ ソレガムゲニワカ、リシ時 松殿ノ攝録臣ニテ御出アリケルニ 忍ビタルアリキヲシテアシクイキアヒテ ウタレテ車ノ簾切レナドシタル事ノアリシヲ フカクネタク思テ 關白嘉應二年十月二十一日高倉院御元服ノ定ニ參内スル道ニテ 武士等ヲマウケテ前驅ノ髻ヲ切テシナリ

重盛が復讐を指図したことは『玉葉』にも明白に記されているが、こうして史料に照らし合わせて見ると、『平家物語』の構図が明らかになる。周知のように重盛は清盛と対照的な人物として設定され、貴族の秩序や儒教倫理を守ろうとする。この重盛像は「山門大衆清水寺へ寄テ焼事」の章段中のそれと一貫していると言えよう。子供が恥ずかしめられても、事態を冷静に分析し、道理を守り、「代ノ乱」を防ごうとする重盛像は「ユ、シク大様ナル者」だと評することも出来よう。

第一本十九 主上御元服之事

嘉應三年七月に相撲の節が行われた。当時重盛は右大将で、列席していたが、「容儀身軀サヘ人ニ勝給ヘルハ」と誉められた。しかし、その一方で、「末代ニ相應セテ御命ヤ短ク御坐セムスラン」と噂されたのは不吉なことであった。子息達も皆「優ニヤシク花ヤカナル人」達であったが、重盛は「心ハヘヨキ人」で、子息達に詩歌管絃を習わせ、「由アル事」を勧めていた。

この逸話は延慶本・長門本・源平盛衰記・源平闘諍録にしかない。延慶本と長門本は殆ど同文であるが、源平盛衰記・源平闘諍録のこの箇所は重盛への誉め言葉を記すのみで、不吉な噂の記事はない。猶、先述のように源平盛衰記は「幽王褒姒捧火」の章段に、この相撲の節を再記し、そこに不吉な噂を書き込んでいる。

この逸話が史実かどうかは確認出来ない。しかし、先述のように、

この時の不吉な噂は文覚の「小國ニ相應セヌ人」という評と密接な関係があると見られる（特に非当道系諸本で）。

第一本三十六 山門衆徒内裏へ神輿振奉事

治承元（一一七七）年四月十三日に山門の衆徒が神輿を時の内裏、閑院殿へ押し入れようとした。重盛は左衛門陣を固めていたが、毫雲に煽動された神輿がこの陣に向かってきた。左衛門陣は混乱し、武士の放つ矢で死傷者が出、十禅師の神輿にも矢が立った。衆徒は神輿を置き捨てて帰山したが、十四日、重ねて衆徒が押し寄せるといふ風聞が流れたので、天皇と中宮は法住寺殿へ移られた。重盛はその警固の中心にあった。二十日、藤原師高の解官と同時に、神輿に矢を射た六人の官兵が禁獄された。二十八日、京に大火があった。比叡山の猿が火を付ける夢を人々は見た。

この一連の記事は全ての『平家物語』にある。但し、例えば、八坂本の十四日の記事が全く重盛に言及しないように、小異がない訳ではない。又、源平盛衰記は、大火の原因として、官兵で、重盛の乳母子であった成田為成の送別の酒宴から起こった火事（『太平記』的行為）を挙げて、描く。

『玉葉』の四月十三日条の神輿に矢が立った記事から二十八日の大火の記事にかけて、『平家物語』の記事に相当するものが認められる。ところが、意外なことに、肝心の重盛との関わりは全く歴史資料に見出すことが出来ない。『平家物語』は何に拠って、その一方の中心に重盛を描いたのであろうか。しかも、興味深いことに、この箇所で描かれている重盛は、「謀モ賢ク」といってお株を全く頼政に奪われている。重盛は神輿に矢を射立てたという責任を問われかねない立場にある。この点、他の箇所の重盛像と異なる。頼政の引き立て役という処であるが、目立たないように事実だけが淡々と記されている風だ。

第一本十一 新大納言ヲ痛メ奉ル事

永萬元（一一六五）年八月九日に比叡山延暦寺の大衆が清水寺へ押し寄せて、これを焼き払った。この時、後白河上皇が大衆に命じて清盛を追討されるそうだという風聞が流れ、平家一門は緊張した。重盛一人だけがそんな筈はないと言って人々を静めているうちに、後白河上皇も驚いて六波羅に御幸された。やがて、大衆が引き揚げ、上皇も還御されることになった。重盛はその御供を勤めたのだが、帰って来ると、清盛が、上皇に風聞のような思いがあるに違いないと述べて、心を許さないように命じた。それに対して、重盛は、そのような言葉を口にしてはいけなと諫め、「叡慮ニ背給ハス人ノ為ニヨク御坐サハ」恐れることはないと言進言した。清盛は重盛を「ユ、シク大様ナル者」だと感嘆した。

この逸話は全ての『平家物語』にある。その内容も、源平盛衰記で重盛が上皇に直接会って真偽を確かめようと参院する途中で六波羅に行幸される上皇に出会う（武士が六波羅に集まる処は重出の気味がある）とか、平松家本の重盛の言葉に「叡慮ニ背給ハス」という表現がないなどの小異はあるが、ほぼ同内容である。風聞に惑わされることなく、冷静に分を守るよう清盛に説く重盛像は『平家物語』諸本に共通するところである。

この章段で描かれている重盛の言動が史実なのかどうかは明らかにし得ない。「ユ、シク大様ナル者」という清盛の評は見事にこの章段の重盛を言い得ていると思う。そして、この「ユ、シク大様ナル者」という評は文覚の「小國ニ相應セヌ人」という捉え方に通じる意味合があるように感じられる。

第一本十六 平家殿下ニ恥見セ奉ル事

嘉応二（一一七〇）年十月十六日に重盛の次男資盛が摂政松殿基房と乗合事件を起こしてしまった。事件を耳にした清盛は松殿を怨むと憤ったが、重盛は資盛の手落ちを指摘して、仕返しを固く止めた。と

ころが、清盛は重盛に相談もせず、田舎武士に命じて松殿の行列を襲わせた。事件を知った重盛は、どうして自分に知らせがなかったかと嘆いて、関係した武士を勘当し、資盛をも礼儀を弁えず悪い評判の種を作ったとして戒めた。重盛は「何事ニ付テモ吉人」と世間の人に誉められた。

この逸話も全ての『平家物語』にある。いずれも相似た筋だが、非当道系諸本に多少の違いがある。南都本では、資盛の供をした侍達が資盛を唆して清盛に訴えさせることになってい、仕返した侍や資盛を罰した後、重盛が暫く出仕を控えたことを付け加えている。又、四部合戦本では、資盛が恥ずかしめられたことを最初に聞いた時に、重盛は資盛や侍の無礼を咎めることになってい、仕返し事件を聞いた後は「大に歎玉ケレとも無シ甲斐モ」とあるだけになっている。四部合戦本のもものは当道系諸本のものや次の源平盛衰記のものと関わりがありそう。源平盛衰記は、「秘本」が重盛の仕業としていいる旨を書き込んでいる。或いは、この「秘本」は藤原兼実の日記『玉葉』の類ではなかったかと思われるが、源平盛衰記はそれらの資料から松殿が重盛に関係者を差し出した記事を取り込んでい。その他、四部合戦本と同じ特色もあるが、重盛の言葉は非常に詳しく、饒舌になっている。南都本の場合は延慶本等の描く重盛像をもっと押し進めたものとなっていると考えるが、四部合戦本や特に源平盛衰記の場合は重盛の道理を尽くした説得も遂に空しかったことを描き出すことになってしまったのではない。

さて、この章段で描かれた重盛が全く史実を離れたものであることは、源平盛衰記に異説として注記されていたが、天台座主慈円の『愚管抄』はこの逸話を次のように記している。

コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクテ 父入道ガ謀叛心アルトミテ トク死ナバヤナド云ト聞ヘシニ イカニシタリケルニカ 父入

段には重盛に言及した表現はない。従って、文覚上人の言葉は、清盛から頼朝へ「日本國ノ大將軍」が移る、その間の微妙な事情を補足したものと観がある。「雅頼卿ノ待夢見ル事」と対照すれば、文覚上人の言葉は『平家物語』の前半に於ける重盛の位置、その描写の基軸について念を押したものと見える。

清盛の「跡ヲモ可繼人」であつた器量人重盛の死を文覚は「小國ニ相應セヌ人」ということで理由付けている。文覚の愛惜の情は明らかではないか（但し、後述の言葉の対応もある）。

今、『平家物語』諸本を見渡すと、重盛が「父ノ跡ヲモ可繼人」であつたという位置付けは諸本変わらない。しかし、「謀モ賢ク心モ強」であつたという言葉は源平盛衰記になく、又、「小國ニ相應セヌ人」という捉え方も四部合戦本や当道系諸本の文覚の言葉には見られない。

「謀モ賢ク心モ強」であつたという重盛評は、四部合戦本に於いてのみ、卷第三の「小松殿死給事」に相当する部分にある「吉人にて心豪に計ヒモ勝レテ御ケレハ」という表現に対応している（延慶本・長門本・当道系諸本には右のような明確な表現の対応はない）。四部合戦本では、文覚は世間の人全ての評を繰り返しただけと言ってよい。一方、文覚がこのような評をしない源平盛衰記は、卷第十一の「經俊入布引瀧」に「賢き計をのみし給ける」という類似の表現を有っている（「心モ強」という表現は出て来ないが、同巻の「大臣所勞」で重盛の挙げたる保元・平治の合戦の折に、そのような面を見出すことが出来よう）。このような状況から見れば、四部合戦本を除く諸本は、それ程表現の対応を構えず（逸話には対応しそうなものがある）、それぞれの箇所ですべて「謀モ賢ク心モ強」であつたという重盛評を纏め、伝えたものかと思われる。

もう一つの「小國ニ相應セヌ人」という捉え方は、第一本十九「主上御元服之事」に記される嘉応三年七月の相撲の節の時の評判に対応す

るものようである。但し、表現の上から見ると、源平盛衰記の「但此國は小國也 内大臣は大果報の人也 末代に相應せずして疾うせ給へし」（卷第六「幽王褒姒捧火」）が最も近い。延慶本・長門本のそれは「セメテノ事ニヤ末代ニ相應セテ御命ヤ短ク御坐セムスラムト申アヒケルコソイマハシケレ」とあつて、「小國」という語が出て来ない（延慶本には第二本二十三「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」にも「實ノ賢臣ニテオハシツル人ノ末代ニ相應セテトク失給ヌル事」という表現がある）。このように、文覚の言葉は彼の在京時、耳にしたかもしれない評判の言い換えという傾向が強い。一方、文覚にそのような言葉のない四部合戦本は延慶本の「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」に相当する部分に「不々相應セ末代に之人にて疾ク失玉ヘルニコソ」という表現が、又、当道系諸本には卷第三「同内府病惱事 同死去事」に「日本ニ相應セサル大臣ニテ今度一定失セナムス」（屋代本）という表現がある。興味深いことに、文覚の言葉は当道系諸本の「日本ニ相應」が最も近く、非当道系諸本は「末代ニ相應」という表現に止まっている（「小國」「大國」という語がその周辺に散らつているが）。

以上のことから、文覚の重盛評は基本的に彼が在京時に耳にした評判に基いているらしいことが浮かび上がって来る。しかも、それは非当道系諸本に於て特に顕著で、表現まで対応させようとしている様に見える。文覚は平家についての情報の核心を掴んでいたということになるのだろうか。

二

『平家物語』で重盛の言動が描かれている場面の主なものを取り上げて、そこに描かれている重盛像などを見てみることにしよう。

第一本十二 山門大衆清水寺へ寄テ焼事

重盛像の検討

——『平家物語』と文覚——

橋 口 晋 作

『平家物語』は、平家の天下は清盛の「悪行」の為に一代で終わり、嫡男重盛が早死にした後、源頼朝の手で天下が鎮められて行く様を描いたものという一面を有っている。この面で筆者が注目したいのは、「文京上シテ院宣賜事」と「兵衛佐蒙征夷將軍宣旨事」の二つの章段における虚構（敢えて虚構と言いたい）である。この虚構によって、頼朝は旗揚げの当初から好敵手である義仲との間に明確な段差を得（勿論、無官の義仲と右兵衛佐に任官されていた頼朝との差は朝廷には歴然とあったが）て、頼朝の手に天下が帰して行くという物語上の流れ（筋）を得ていると考える。頼朝の押し出しは『平家物語』の成立に密接に関わっている事柄ではないか。^(注二)

このような頼朝像の描出に積極的に関わっているのが文覚上人である。この点で、現存の『平家物語』は文覚上人の顕彰運動と強く結び付いて成立したのではないかと予想される。

さて、このような意味で注目すべき文覚上人は、清盛、頼朝の間、重盛の位置についても興味深い見解を披瀝している。文覚上人が『平家物語』作者の虚構の核であるとすれば、彼の語る重盛像も又、史実から離れ、そのように虚構して描かれているのではないかと思われる。本稿は、そのように、重盛像が文覚上人の言葉のように虚構されていることを確認して、文覚上人が『平家物語』（成立）の核であることを浮き彫りにしようと試みるものである。

重盛像の検討（橋口）

文覚が披瀝している、重盛についての興味深い見解というのは、延慶本第二末七「文覚兵衛佐ニ相奉ル事」の章段の中で、頼朝に対して語られた次の部分のことである。

花一時人一時ト申譬アリ 平家ハ世末ニナリタリトミユ 大政入道嫡子小松内大臣コソ謀モ賢ク心モ強ニテ父ノ跡ヲモ可継人ニテオワセシカ小國ニ相應セヌ人ニテ父ニ先立テ被失ヌ 其弟共アマタアレトモ右大将宗盛ヲ始トシテ有若亡ノ人共ニテ一人トシテ日本國ノ大將軍ニ可成ヌ人ノミヘヌソヤ 殿ハサスカ末タノモシキ人ニテオワスル上高運ノ相モオワス 大将ニ可成給相モアリ サレハ小松殿ニ次テワ殿ソ日本國ノ主ト可成給人ニテオワシケル

予測されることと思うが、本稿では延慶本を中心にして『平家物語』を見て行く。というのは、頼朝が反平家方の中心として描かれているということになれば非当道系諸本がその本来の姿を残しているのではないかと考えられて来る。その中でも、第六末三十九「右大将頼朝果報目出事」で全編を終える延慶本の形は、この頼朝を押し出した『平家物語』の本来の姿にかなり近いと思われるからである。

さて、文覚は、「花一時人一時ト申譬」があるように「平家ハ世末ニナリタリ」と頼朝に告げる。文覚がそのように見るに至ったのは重盛が死去したからである。重盛について、文覚は「大政入道嫡子」と言い、「謀モ賢ク心モ強ニテ父ノ跡ヲモ可継人」と述べている。文覚は「日本國ノ大將軍」の器量を見抜いていた。

ところで、「日本國ノ大將軍」が平氏の清盛から源氏の頼朝に移されるということは、既に第二中三十四「雅頼卿ノ侍夢見ル事」の章段で「御劔」を預けられるという象徴的な形で示されていた。しかし、この章